

神國日本と皇軍原理

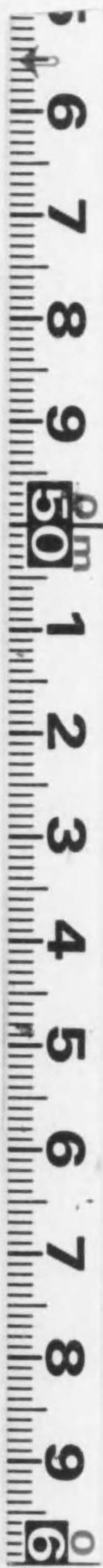
前篇

特259

670

55

66



始



627

特259
670



陸軍少將 賀宗之 著

神國 日本と皇軍原理

東京 大日本國防協會版



欲還天下
富貴之
安

明治天皇陛下親筆之一節

乃城護書

著者の詞

日本は神國であると云ふが、それは何故であるか、之れを識らなければ眞の日本を見出すことは出来ない、唯だ神國呼はりをするだけでは迷信であり同時に疑はなければならなくもなる。

日本は神國であると云ふことを認識しないでは、我が國體の眞髓を知ることが出来ない、同時に吾々民族には、果して特殊の使命なるものがあるかどうかも疑はれる。

故に日本は神國であると云ふことを識るのは、吾々民族の自覺の根元であるから、徹底した釋明を要する。

日本は何れの方面から研究しても、神國であると云ふ結論に歸納

し得るけれども、順序としては日本の淵源から研究しなければ徹底しない。

神國と云ふ以上、神と云ふことを度外して釋明することは出来ない、夫れ故本書は先づ神とは何んであるかを前提とし、日本は神國であると云ふ其出發點から述べたのである。

所述は概念的であるが要領は徹底させたつもりである。敢て通讀を乞ふ次第である。

昭和九年四月

万
城
識

『本書刊行』について

(一)

近代人は、ともすれば科學萬能を信じ、科學に立證されぬ一切を否定し、現在これに賛成する者が存外多い。併し乍ら現在の科學が認めぬからとて早速其存在を認めぬことはやつぱり一種の迷信で、其思索が科學の範圍を出ぬ所謂、科學宗迷信者と云ひ得る。

今日の科學は地球の廻轉を教へ、且つそれを立證してゐる。此處迄が科學の最上限度である。而して其地球の廻轉は誰れがハンドルを執るか、はまだ科學では教へてゐない。地球のハンドルを執るもの、即ち地球廻轉の原動作用があつてこそ地球は廻轉する。此の原動作用とはそも何物であるか？。今日の科學では説明出来ない超科學的作用を的確に、忠實、理論的に解説したものが即ち本書である。

(二)

宇宙意識がわからなければ神(超人間的な大きな力)を認識する事が出来ない。神を認識して初めて我が國體の尊嚴さと有難さを識る事が出来る。國體の尊嚴と有難さを理解出来

て初めて日本民族の使命がわかつて来る。これを訓へたのが本書である。

(三)

宇宙は神の作用によつて、活動を開始した。世界の中心と云ふものは、神である。神が世界のすべての中心軸をなしてをる。

日本のあらゆるものの中心は天皇である。天皇は現人神である。現人神、即ち天皇は世界の中心で、日本は、世界の中心軸をなし、世界を統制すべき重大責務を有してゐる。故に、吾々日本民族は世界の總ての優れた、精神と技能とを備ひ全人類福祉の爲めに指導しなければならぬ。然らば如何にすればよいか、之れを詳述してゐるのが本書である。

(四)

明治天皇御親翰の一節 「欲置天下於富岳之安」

の大御心を拜してこの刊行を敢て致した。吾人の意を諒とせられよ。 乞ふ、眞の日本を知り、眞の日本民族の使命を體得せんとする人に切に本書の愛讀を薦む

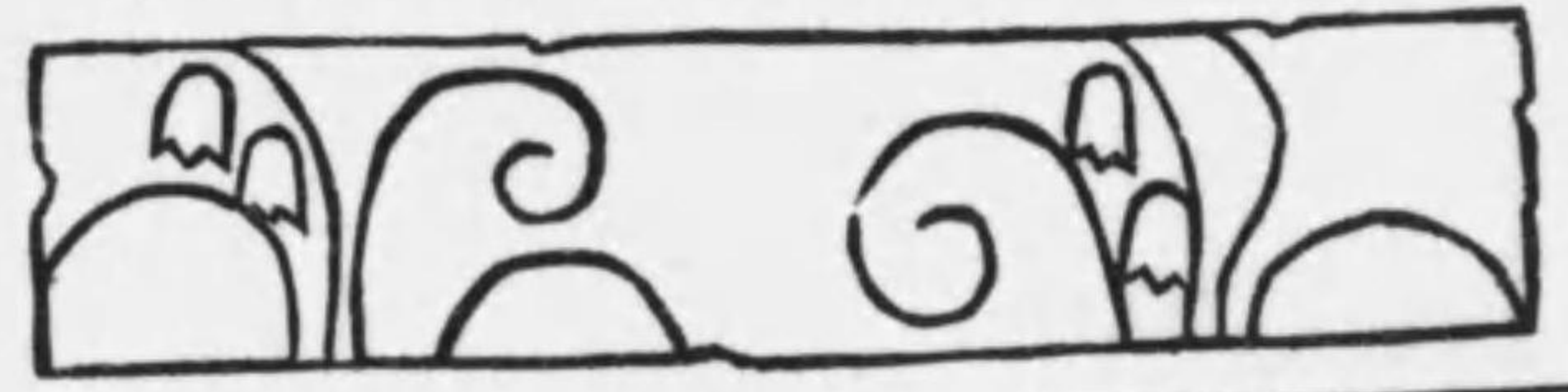
昭和九年四月十日

東京、世田谷の寓居にて

松本富夫

次 目

第一	緒 言	(一)
第二	神の有無に就て	(四)
第三	意識とは何か	(九)
第四	宇宙の正體	(一五)
第五	人間の兩意識の比較	(一八)
第六	太陽系中心意識及び人間との關係	(二〇)
第七	宇宙意識と神	(二五)
第八	古事記に就いて意識研究	(二六)
第九	世界の神位	(三六)
第十	神 權	(四三)
第十一	天皇と神	(四四)
第十二	日本の國體	(五一)
第十三	日本民族	(五三)
第十四	日本の使命	(五五)
第十五	結 論	(六一)



神國日本と皇軍原理

(前編)神國日本

陸軍少將 万城多賀宗之著

第一、緒言

宇宙一切のもの、吾人の眼前に現象せると現象せざるとを問はず、苟くも存在し、及び存在の因を爲すもの乃至一切の作用及び作用の因と爲すものは、其悉くが神と稱へる全智全能にして創造破壊の偉大なる力を根元とし、之れに依つて結果したものである。故に宇宙の一切は神の作用の結果ならざるはなく、神を離れて何ものも存在せず、同時に神は宇宙に充滿して作用せざる所なく、吾人亦其現はれの一微分子である、随つて宇宙の一切は悉く神縁に繋がれて存在するのである。

是れに由つて之れを觀れば、此地球は神の地球であり、地球上の陸も海も神のものであり同時に其陸と海とにて成る各國々も亦神のものであり、何れも神の手に依つて造られた國土

であるから各國共に神國である。然るに古來吾々祖先からして、我が日本をのみ神國と稱して居るのは己惚れの自稱語ではなからうか、日本は神國なりとは日本のみに通ずる稱語であつて、世界各國に對しても我れ神國なりと誇稱し得る理由があるのであらうか、神皇正統記の冒頭に「夫れ日本は神國なり」とあるから日本は神國であるでは何も理由にもならない。又日本の古代のことは古事記に書き残されて居る、而して神武天皇建國以前の神代記録には天の御中主神以降、系統的に神々が活躍せられて皇室の御祖先となり、神武天皇の御出現になつて居る、日本の中心は皇室であり、皇室の御祖先は神々に在らせられる、此神々が御肇めになつた日本は即ち神國であると云ふが、吾々日本人同士は殆んど無條件で之れを肯定するけれども、之れ亦日本が神國であると世界に向つて宣言するには餘りに漠として物足らない點がある。外國の歴史でも其根元は神話に出發して居る、而して其神話なるものが果して歴史の事實を語つて居るのかどうかも明かでないのが一般である。其不明瞭なものを強いて確定的根據として云々することは、理論の上に於て肯定することが出来ないこと云ふことになると、日本は神國なりと云ふことに就て、更に他に適確なる根底を捉へなければなるまい。

斯く曰ふ古事記を土臺として研究し、それを歸納させることは間違つて居ると云ふのではない、古事記を土臺とするならば、其前に古事記其もの、検討を正しくして置かねばならぬであらう。元來古事記は其全部が歴史ではない、神武天皇以前は神代史ではない、神代記であり、傳説である。併しながら決して御伽話ではない、神祕を傳説化したものである。神武天皇以降は歴史であり、事實である。歴史は史實であるから其事實を認めればよい、傳説は神祕であるから神祕的研究に依つて正しく認めなければならぬのである。

然るに古事記全部を歴史として、神代記を歴史眼を以て研究し、事實としては矛盾の點が少なくないから古代の御伽話を認めるものもあつて、神代記の精神を無視して了ふものもある。又近來の研究は一步進んで、古代の日本人祖先の思想を書いたものであると認めるに至つた、是れだけでも非常な研究の進歩で、神代記の精神の何かを掴み得たのであるが、まだ眞隨に觸れて居ない。又或者は歴史や思想以外に、言靈の方面から研究し、或は種々勝手な方面から解釋を試みて居るが、其れもが神祕の解釋ではない。兎に角何れの方面から如何様にも解釋し得る如く書き残されてある所が神代記の偉大なる所である。

斯く神代記に對する解釋は統一されて居ない、其統一されて居ない各自勝手の解釋を土臺として、神國日本を言ひ現はそうとすることは實に至難である。無論神代記を正當に神秘眼にて解釋すれば立派に日本が神國であると云ふ結論になるのであるが、此處では古事記の研究に觸れないで暫く参考にとどめ、さうして日本の國を正視して果して神國と稱し得べきや否やの結論に進みたいと思ふのである。それは日本が果して神國ならば、何れの方面から研究しても夫れに歸着すべきものである。單に古事記と云ふ一方面だけの結論では心細い結論である。又諸種の文獻から其資料を求めたのでは、其文獻を肯定しない時には其結論も亦肯定し得られないものになる。寧ろ他の方面から研究して古事記及び其他の文獻にあることを自然的に立證するのが順序であらう、隨つて本書の説述は何等文獻等から引證したものでないことを特に前提として置く。

第二、神の有無に就て

神國と云ふことは、果して有り得べきことであらうかと云ふことからして考へなければな

るまい。又神國と云ふことが有るにしても無いにしても、元來神と云ふことは何んであるか神其ものゝ定義、若しくは神の有無からして定めてかゝらなければなるまい。

神とは宇宙の創造者であると云ふた所で、依然神と云ふことは漠然として解らない、又神は吾々とは、餘りに縁遠いものゝやうに感ぜられる、それかとして神を見せて呉れと言ふた所で神は見えるものではない、若し見えたら、夫れは神ではない、人間のやうなものか、若しくは化物であらう、見えない所に神と云ふ尊さを想像される、併しながら見えないから神は無いとも云へないことはないが、人間の目で見えないからとて存在を認めない譯には行かない人間の眼は極めて不完全であつて、太陽の光線にしても紫外線も赤外線も見えない、唯だ其中間の七色だけしか感じないやうになつて居る。犬や猫の眼は人間より、より以上のものが見えるやうにも思はれる。斯く考へて見ると、人間が自己の五感のみを本位として一切を定めて了ふことは不合理である、例へば香の如きものは眼に見えないけれども其存在は確かである、眼に見えない手にも觸れないから無いと云ふことは言へない、之れと同様に見えないから神はないと云ふことは成立たない。

然らば神が存在するとせばそれはどうしたら解かるかと云ふことになるが、無論體驗者にはそれが解つて居るであらうが、其體驗者と雖も他のものに神を見せてやることは出来ない又御利驗に依つて神の存在を認めさせると云ふものもあるが、如何に御利驗だと云ふても神の存在を想像し得やうが、實在を確認することは困難であるのみならず、人に依りては御利驗と稱するものを單に偶然の奇蹟と軽く見て了ふから其人には何時迄も神は解らない。從來神を知らしめやうと種々苦心して或は御利驗を説き、或は尊嚴を説き、或は感謝の對象とする等百方から神を認めさせやうとするものが少なくないが、之れは神を見せるのではなく神の押賣りで、結局神の存在は有聊無聊になつて了ふ。又神を研究し何等かの體得を得んとしても、神を説くものは無闇に神秘の扉を固くして神に觸れさそうとはしない、又彼方此方に活神様然と構へて、神の御告げとか神の御使とか鹿瓜らしく信徒や迷信者を集めて居るものも少なくないが、それが果して神の御告げや神の御使であるか、其多くが神の名を擔いで迷信に誘ひつゝあるものである、こんなことで神の實在を肯定し得ぬことは勿論である、斯く詮じ詰めれば、神の實在は疑はしくなる、又敬神を鼓吹すれば仕方なく敬神の表現はしても

心の中では神を認めて居るものは少ない、随つてそれは偽はりの敬神表現である。世に無神論者の少なくないのは寧ろ當然であると云ふべきである。

無神論者は科學に魅せられて科學以外に盲目なるものに多い、科學萬能を信じ、未だ科學に立證されぬ一切を否定するので、現在之れに賛成するものは案外多い、併しながら今日の科學で認めないからと謂つて、其存在を認めないと云ふことは同じく迷信であつて、其思案が科學の範圍を出でないからである、例へば現在の科學は地球の廻轉を教へ且つ之れを立證して居る、此處迄が科學の最上限度である。其地球の廻轉は誰れがハンドルを執つて廻はして居るのかと云ふことは未だ科學では教へて居ない、此教へて居ない範圍即ち超科學の内に如何なるものがあるか、之れを認めないで今日の程度の科學に現はれない總てを否定するのは間違つて居る。地球を廻はすハンドルを執つて居るもの、即ち地球廻轉の原動作用があつてこそ地球が廻るのであるから、此原動作用とは何ものであるかと考へなければならぬ、而して此様な超科學の力や作用は、唯だ地球廻轉ばかりでなく、宇宙の一切に加はり作用し現像しつゝあることは想像でなく事實として認められ、或は考へられるのである、之れを以

て直ちに神なりとして了ふのは餘りに専斷であるが、それが果して神なりや否や、或は神は別にあつてそれから斯かる力や作用が出るのであるか等を考へてから證認すべきや否やを究むべきものであらう。

又神なるものが實在であつても、其ものが自ら神と名乗り出たものではない、人間の方から何ものかを想像し、或は認めて神と敬稱したのであるから、何んと稱しても差支ない譯である、故に其超科學の不審議なものを造物者と云はうが、ゴッドと云はうが、或は佛とか、如來とか、天帝とか稱へるのはそれは人間の勝手である。兎に角現在科學の範圍外に何か偉大なるものがあるべき筈である、太陽も、地球も、此宇宙も、又宇宙一切のものも、科學の力では出来ない所を見ると、どうしても科學以外の何物かの作用が實在を認めなければならぬことになる。言ひ換へれば人間の眼に見えなくても、亦科學で立證されなくても、或る偉大なる何物かの存在は、想像でなく實認しなければならぬ、又存在する以上は何か作用しつゝあらねばならぬ。然らば其偉大なるものは何物かと云ふことを突き止めなければならぬ。

第三、意識とは何か

吾々人間には意識がある、其他の動物にも亦意識がある、此意識は誰れが與へたのであるか、吾々の意識は決して吾々が自ら與へたのではない、假りに親が與へたとすると、其親の親の親、即ち最初の祖先の意識は誰れが與へたのであるか、又水が腐ると虫がわく、或は虫がわいて水が腐る、其虫の意識は誰れが與へたのか、まさか空氣から貰つたのではあるまい、假りに空氣が吾々に意識を與へたとすると、其空氣には意識の持合せがなければならぬ、其空氣の意識は誰れが與へたのか、又其空氣は誰れが造つたのか。斯く考へると何處かに意識の本元があつて、それからどしどし意識を分け與へつゝあるのではないか、然らば其意識の本元は何處か、まさか此宇宙間に意識の倉庫のやうなものがあるとは思はれない、却つて宇宙一切のもの悉く意識に觸れて出來たのではないか、そうすると意識は宇宙に充滿し、それが吾々人間にも分かれて入つたのではないかとも考へられないことはない、そこで吾々に最も手近い吾れと云ふ人間其ものからして解決を試みなければなるまい。自己の解決を差置い

て他を適當に解決し得られるものではない。

吾々人間には儘に意識がある、それは現在意識と潜在意識との二つであると云ふことになつて居る、そうすると吾々人間は一個の體に二個の意識を持つて居る、何故に吾々は二個の意識を持つて居る、何故に吾々は二個の意識が必要であるか、其處に疑問を生ずる、吾々は肉體であるから、肉體に必要な現在意識は無論なければならぬから現在意識は儘かに吾々の專有物であつて、之れを肉體意識と謂つても差支へない。然るに潜在意識は潜在して居る意識で、何んの必要あつて吾々が持たなければならぬのであるか、又持つて居て如何なる作用をして居るか、吾々は漠然と現在潜在の兩意識を專有して居ると云ふ結論だけを見て居ては意識と云ふことの根本が不明瞭である。

そこで考へるのに地球を廻轉する其ハンドルを執るものは地球以外のものであつて、而してそれが地球に力となつて加はつて居る如く、人間は現在意識と云ふ肉體意識で動いて居るが其動くハンドルを執つて居るものは肉體以外に在つて、それが肉體を動かす根元がなければならぬ、其人間の活動の根元を潜在意識と稱へて居る、言ひ換へれば地球を動かす其根

元作用は地球の潜在意識で、人間を活かして行く其根元は人間の潜在意識であると言ひ得るさうすると始めて人間は二つの意識を持つて居るやうに思はれる譯が解かる。

故に現在意識は人間の專有物であり、肉體の存する限り實在するものであつて潜在意識は其肉體へ他から分派されたもので固から此肉體が專有して居るものではない。然らば他から此肉體へ宿ると云ふ其「他」とは何處であるかと云ふと宇宙から分派されたと云ふ外に出所を突き止めることは出来ない、さうすると此宇宙には意識なるものが存在すると云ふことになる。而して此意識は唯だ人間にのみ分派されて居るのでなく、宇宙にある一切のものは悉く宇宙意識に包まれて居るから一切の動物にも植物にも同じく分派されて居る、植物には肉體意識即ち現在意識がないから自ら動くことは出来ないが、潜在意識が分派されてあるから肉體的には不意識的であるが、潜在意識が働いて生育に必要な作用を爲して行く。例へば胡瓜の蔓には眼はないが、其蔓の手は恰も眼がある如く附近の竹木を求めて纏ひ付く、植物學者は之れを觸覺と云ふて居るが、其觸覺即ち潜在意識の作用に外ならない。然らば動植物以外はどうかと云ふと、一個の不動の器物でも、其分子々々を結合させる體を爲さしめて居

る、それも潜在意識が加はつての結束と認められる、又物體は不動ではない、其分子は電子とか云ふ陰陽兩電の活動の結束であると云ふ學說から考へても、矢張り動體である、已に動體である以上必ず意識が加はつての動體であるから、矢張り潜在意識が必要だから分派されて居る、但し植物と同様に全然現在意識がないから叩いても割つても痛いとか云ふ體感はない。

斯く考へて行くと、苟くも宇宙間にある一切のものに意識が加はらないものはない、言ひ換へれば宇宙からの意識を與へられなければ此宇宙間には存在することが出来ない、此宇宙に瀰漫せる意識は即ち宇宙意識と稱すべきものである、此宇宙意識は宇宙に充滿し、此宇宙意識は其充滿せる全宇宙に於て夫れ／＼間斷なく作用をして居り、それが或る最高の構成意識となつて人間に分派したのが人間の潜在意識である、而して其分派せる宇宙意識は人間に於て最も完全に組織されたものであるから、動物植物其他物體に應じ分派された潜在意識の構成と作用には夫れ／＼の相違がある譯である。

然らば潜在意識の正體は何かと云ふと、それは分派さるべきものに應じて異なるが、動物

に就て言へば概して指導意識である、其ものを存在せしむべく指導するのであるから、分派物に應じて各個各別であるのは當然である。例へば蜘蛛の如きは生れながらにして立派な巢を巧みに張る技能を指導されて居る、蜘蛛は決して生れてから後に習つたものではない、又翌日の天候も豫覺し得て、明日無難の日だと其前夕頃から巢を張り出す、其他の動物も天候や天災等を豫覺する等、人間の現在意識では測知し得られぬことを動物は無意識（現在意識から云ふて）に行つて居る。人間に分派されて居る宇宙意識は最も完全のものであるから、動物以上に指導されて居るのであるが、人間は現在意識が著しく發達して居て、之れが發達すればする程横暴を極めて宇宙分派意識を抑壓するから、指導意識は潜在して動物の如く表面に立つて指導しない、其證據には昔の人は今日の如く餘計な現在意識の發達がなく、所謂單純であつたから、潜在意識は往々表面に立つて指導した、即ち人間に預感をさせたり指導したりした、夫れ故昔の人は神曰くとか神に導かれてとか云ふ場合或は奇蹟的事實が少なくなつたことは歴史其他の書物上で認められる。現在でも神懸りとか靈懸りとか、現在意識以外から指導されるものがあるが、それは現在意識が滿腹的に發達した學者や俗者になくて、

現在意識が純真か、或は無學である特殊境遇者、或は特殊使命者に多いのは此理由に因るのである。

夫れ故現在意識の横暴を抑へ得ればそれだけ潜在意識が浮び出で、現在意識を超越した指導を得られる、精神統一とか冥想とか云ふことも、現在意識の横暴を控へて潜在意識の偉大な指導を受けやうとする一手段であり、又行者が山へ入つて瀑に打たれたり難行苦行をするのも現在意識を滅却して潜在意識の指導を容易ならしめんとする手段で、其結果所謂神通力を得たと云ふことになる。又禪家の坐禪も自己の力で現在意識を滅却させ、そこに偉大なる宇宙分派意識たる潜在指導意識の活動を現はさせるので、此境遇を悟りを開くと謂つて居る。要するに吾々人間其他にある潜在意識は宇宙意識の分派である、分派であるが故に宇宙意識とは不斷の連絡があり、此連絡を完全に感受し得たならば、偉大なる意識指導を受けて偉人ともなり超人物ともなるのである。古來宗教の開祖と云ふ人は多く是れである、弘法大師の奇蹟も、日蓮上人の法力も無論是であり、又近くは天理教のおみき婆さんとか大本のおなを婆さんとかも亦此一部人として認めて差支ないかもしれない。

第四、宇宙意識の正體

宇宙は意識から成立つて居る、同時に宇宙一切のものは宙宇意識に觸れないものはない、結局宇宙意識の加はらないものは此宇宙に存在することが出来ない、日月諸星乃至風火水土や生物の如き現はれたものも、又電力磁力乃至音波光波等全然見ることの出来ないものでも悉く意識作用の結果であつて意識以外に單獨に現はれ單獨に作用し得るものではない、言ひ換へれば宇宙一切のものは宇宙意識の統制下にあるので、何ものも此統制外に脱逸して存在し若しくは作用し得ない、統制あるが故に宇宙には衝突もなければ矛盾もない、若しも統制がなく各個に存在するものであつたならば、地球と星と衝突したりする、宇宙の妙は言ひ難しとは即ち此統制あることを云ふのである。

已に統制ある以上は中心がなければならぬ、共同統制と云ふことはあり得ない、若しあつたらそれは相互の約束統制で何かの動機で一部の破壊から全部の統制が破れて了ふ、宇宙はそんな危険な間に合せの統制ではない。故に宇宙には一大意識的中心があつて、宇宙の一

切のものは其中心に依つて直接に統制されて居るが、或は一大中心から更に幾多の分派中心があつて、夫れ々其分派中心下に統制されて居るかであつて、宇宙の統制は中心意識に依つて行はれて居ることは認めなければならぬ、此宇宙中心意識を造物者とか、或は各宗教毎に種々の稱へ名を付けて居るが、それは後に討究することにする。

叙上の中心意識及び其中心から宇宙に充滿する意識並に、人間其他一切の生産物等に分派された意識は如何なるものであるか、意識の存在は認めても其意識とは何ものであるかと漠然としてはなんにもならない、是非其意識の正體を知らなければならぬが、之れは大問題であつて、意識の構成等に就いては別に論述すべきものであるから此處ではそれに觸れないことにする、但し次の如く言ひ得る。

宇宙意識は創造破壊の作用は無論のことであるから、如何なる大なることでも、如何なる小さきことでも、如何なる變化でも、企て得ざるなく爲し得ざることなき絶對無限の偉力を有し、所謂全能である。又如何なることか過去現在を問はず知らざるなく、如何なることでも記憶せざるなく、所謂全智である。故に宇宙意識は絶對的全智全能である。宇宙に於ける

全智全能のものは神と稱へべきものであるならば、宇宙意識即ち神と敬稱して差支へない、又斯かるものを佛とかゴツドとか稱へてもそれは人間の勝手である。

此全智全能で爲し得ざるなく知らざるなき偉大なる意識の其分派が吾々人間等に潜在意識として宿つて居るのであるから、之れが働く時は其肉體には人間以上の智慧も出れば力も出るから、神智金剛力も不審議ではない、同時に人間は自己の潜在意識を仲介者として偉大なる宇宙意識に交渉することも出来る、眞の神懸りは是れである。

現在意識が発達しない動物は専ら宇宙意識の若干を自己に分派せる潜在意識に依つて現在意識の不滿を補つて生活に差支へないだけの指導をして居る、故に動物は、現在意識から云ふと無意識に巧妙なる働きを爲しつゝあるのである、又人間でも生れたばかりは肉體が不完全であると共に、其肉體意識即ち現在意識は完全に働き得ないから、其赤兒に分派された潜在意識が生活と生育に差支へないやうに補つて居る、例へば生れてから直ぐに誰れも教へないでも乳を吸ふ等の如きである。

植物にあつては現在意識は全然與へられて居ない、唯だ不完全ながら其生育繁殖に必要な

る潜在意識のみを附與され、之れが植物の主體を爲して居る、青い莖から直ちに紅の色の花を咲かすことも、又種々なる技工的或は美術的生育も、又種々の形に結實する等も、植物自己の意思ではなく、全く宇宙の分派意識の作用であることは言ふ迄もない。動物と植物との區別は動と不動との形にあらずして、現在意識の有無を以て區別するのが當然であらう、如何に形が植物の如きものでも、それに刺戟を加へるか、或は他の方法で微かでも現在意識があり體感があると認むるものは動物の部に屬すべきものである。

第五、人間の兩意識の比較

現在意識は肉體意識である、肉體あるが故に現在意識を必要とする、故に肉體が生育を停止すれば肉體は解體し還元するが故に、肉體意識は不要となる、即ち肉體は生命を絶つと共に現在意識は無用のものになる、無用のものは一切宇宙に存在し得ないのが原則であるから現在意識は肉體から分離すると共に解體し消滅する譯である。若しも現在意識が不滅で、更に他の肉體に宿ると假定すれば、其肉體は自己の前身を明瞭に知り得る譯であるが、現在意

識は俗に曰ふ生れ代はることはなく還元して了ふ、還元とはどうなるのかと云ふと、現在意識も亦單一組織でなく、人間其他各種動物に依り夫れ々構成を異にし、人間のものが最も良く構成されて居る、其構成を分解して無意識になつて了ふのである、今此處ではそれが如何に構成されて居るかとの問題には觸れることを控へる。

潜在意識は肉體の専有物でなく他から分派されたものであるから、肉體が消滅しても潜在意識は消滅しない、肉體が生命を絶つと共に最早解體する肉體には必要がないから、當然肉體から分離する、分離してどうなるかと云ふに、遊離状態になる、此遊離したものは依然宇宙に存在する、之れを其人間の靈と稱へるのも魂と稱へるのも其名稱は隨意である。此遊離意識は多年人間の肉體に寄留して居ると共に、指導的位置に在つた關係上、其人間の肉體生活中の一切を記憶し、同時に宇宙意識の分派であるだけ宇宙一切のことも關知して居るから比較的偉らしいものになつて、肉體であつた其人を代表して存在する、故に人間が或る方法で其遊離意識に交渉を付けると、靈媒を仲介とし、或は直接に所謂生前のことや或は現界以外のことについて知らせると云ふこともある。

又肉體生存中執着等の特殊事實があると、其現在意識の強い執着の念は潜在意識に膠着して苦痛的経過を爲し、或は子孫や他人に種々なる手段を以て訴へたりする、其結果を祟るとか何んとか俗に稱へて居る。又其當人の遊離意識の苦惱状態を佛家では浮ばれぬとか成佛出來ぬとか、餓鬼道に在るとか稱へて居る。

肉體が生前に於て勝れたる正しき現在意識に依り、人格を超越して所謂神格を得る如き立派な人間の遊離意識は、自ら眞理に徹底したるものとなるのであるから、完全なる若くは完全に近き遊離意識として不純なる現在意識の拘束がない、随つてそれは宇宙意識の一部分としては活躍し得る譯である、之れを神になつたとか何んとか稱へて居る。本書の目的は此等のことを委細に説明しやうと云ふのではなく、單に意識なるものの釋明を目的とするに過ぎないのであるから先づこれ位で打切つて叙上の宇宙意識は如何に作用しつゝあるかを述べて愈々神國と云ふことは有り得べきや否やに説き及ぼすことにする。

第六、太陽系中心意識及人間との關係

宇宙意識は何んの爲めか知らないが此太陽系を造り、さうして太陽月地球の三つは吾々に直接の關係を與へて居る、故に吾々は太陽系人であつて、此系統内に於ける宇宙意識の矛盾なき合理的作用の下に生活をして居るのである。即ち太陽系には太陽系の一大中心意識があつて、太陽系内一切のものは此太陽系中心意識の統制下に衝突もなく矛盾もなく經過して居るのである、而して吾々の潜在意識も亦太陽系中心意識の系統から分派されたのであることは勿論である。更に言ひ換れば吾々の潜在意識は太陽系中心意識の子であり、孫である、而して吾々は其子であり孫である所の分派意識に支配され、指導され、且つ其縁に依つて肉體の生命を保つて居る、今其中心意識に神と云ふ敬稱を付ければ、吾々は神の子であり且つ神に依つて生命を保つて居る、肉體が神との縁が切れたら生命も斷絶する、随つて神即ち吾々の生存の根元であるとも云ふことが出来る。但し其中心意識なるものが果して昔から神を稱へ來つたものがあるや否やは尙ほ考へて見なければならぬ、同時に此意識以外に何か偉大なるものがあるかどうかをも考へたい。

宇宙の現象の根元は意識であり、一切を此意識が支配するから最早此以外には意識に勝る

何ものも有らうとは思はれない、又有るべき筈がない。然らば此意識を絶対のものと認めて意識と人間との關係を究めることが、意識を識り、吾々人間を識り、吾々周囲の疑問を解決し得らるゝ唯一の方法である。

吾々は先づ自己を土台として考へて見やう、吾々人間は幾十萬年前に地上に發生したかは別問題として、兎に角人間は祖先以來現在意識的に進歩發達をして來た、さうして現在意識に馬力をかけた結果、科學は自然を證明するなどと大袈裟なことを言ふものさへある迄になつた。然るに犬猫等の動物は少しも進歩發達しない、今後幾十萬年経つても犬や猫が靴を抱へて眼鏡をかけて學校へ通ふなどと云ふことは斷じてない、幾萬年前の犬猫も今日の犬猫も少しも變りがないと思ふ、人間は猿から進化したなどと云ふものもあるが、動物が進化することはない、硬化はあるが進化はない、人間は元から人間で決して動物が進化したのではない、猿は人間に似て居ても猿は猿で永久に猿である、其他の動物でも似て居るものは澤山にあるが、それは進化して似たものが出來たのではない。無論人間も祖先時代から毛の具合とか骨格の具合は時代に應じて自然に轉化したと思ふが、吾々祖先は斷じて猿でもない、ゴリ

ラでもない。兎に角多數の動物の中で人間だけが進歩するのは如何なる譯である、それには人間に限つて何か使命があるからとしか思はれない、使命があるとすれば誰れが使命を與へたか、吾々に特に完全なる潜在意識を分派し、同時に最優等の現在意識を附與した宇宙意識でなければ外にありやうがない。さうすると宇宙意識には人間に使命を與へるに付ては何か企劃がなければならぬ、漫然と人間にのみ特殊地位を與へたでは譯が分らない。

元來此太陽系を造り地球を造り上げ、さうして生物をも造つたのは太陽系中心意識であるさうすると太陽系中心意識は地球を造つただけではいけない、其處に生物を植へて地球を理想化し、植へ付けた人間に種々なる試練を施し、立派な試練を経た幾多の意識から優秀意識を選んで宇宙意識と共同作用を爲さしめんとするのであるが、優秀ならざる意識は更に地上に植へて再試練を爲さしめる、更に幾多の不良意識は不斷の苦痛の末に終には分解し還元せしめられる、之れを言ひ換へれば、優秀なる遊離靈は神として經營に共同作業を爲す幸福なる地位に立つが、優秀でない遊離靈は更に現界の犬か馬か知らぬが、或る肉體に分派憑依して再試練を課せられ、不良遊離靈は極めて苦惱の立場に置かれて幾百年か幾千年かの後に

は分解消滅されて永遠に存在を絶たれて了ふ。此等の關係に付ては極めて複雑の釋明を要するのであるが、此處では單に宇宙意識には企劃があり、其企劃は人間に使命を與へて進みつゝあると云ふことを述べるに止めて置く。

斯く宇宙意識は地球の理想化に務め、人類の生活を世界大平和に導かんとしつゝあるのである。併しながらそれは宇宙意識のみの作用では出來ない、人間との共同作業の結果に俟たねばならないから、其の爲めに各人間には宇宙意識からそれに必要なる意識を分派して潜在意識とし、人間を指導する位置に在らしめてあるのであるが、人間の肉體へ與へた現在意識が横暴を極めて、人間は自我本位となり、容易に宇宙意識と一致の行動を取らない、之れを習慣的の言葉で言へば、人間は勝手氣儘を盡して神の心に一致しないと云ふことになる。そこで宇宙意識は種々なる天變地妖や、戦争其他の災害を以て、人間を懲罰的に矯正しつゝあるのであるが、萬已むなきに至れば此地球をも破壊するが、或は大變動を以て現人類を絶滅して更に理想の建設を繰返へすことになるかも知れない。

以上に述べたことは極めて概要であり抽象的の嫌ひもあるが、兎に角宇宙意識なるものゝ

存在と人間との關係等に付て前以て承知して置いて貰はないと、以下所述の根元が不明になるから、其概念を必要の程度に述べたのである。兎に角日本を釋明するには斯くも根本から述べなければならぬと云ふ所に日本の偉大なることが想像されやう。

第七、宇宙意識と神

兎に角以上で宇宙意識と人間との關係を一通り述べ來つた、之れに依つて次の如く結論するのである。

「宇宙意識なるものは絶對であり宇宙一切の始元であり全智全能の大意識、大偉力であつて且つ宇宙の企劃者であり、創造破壊の權能者であり、而して宇宙の一切を統制的に統率し作用せしめ、人間に使命を與へて世界を理想化せしめんとする所の、眼にも見えず、手にも觸れず、耳にも聞へざる力の根元である、而して其存在は否定することが出來ないのみならず、却つて宇宙間に充滿して居ることを實證される。」

斯く思考する時は、之れに敬意を致すべきは當然であつて、古來全人類が之れを想像して

神と云ふ敬語を以て稱へることも當然である。之れを神とせずして他に神なるものゝ存在を考へることは出来ない、又斯く思ふ時に神の全貌は正しく觀取せられるのである。そこで古事記の神代記の全部も肯定し得られる、それに書き残されたる所に依れば天之御中主神は宇宙に突然出現したが、何も爲すことなく、且つ獨り身で隠れられたとあるのは、天地の初め何んにもない空間に中心意識が現はれたが、此中心意識自體は活動しなかつたと云ふので、それが高産巢と神産巢と云ふ兩神、即ち生と産との力となつて宇宙の作用が始まる、それを天之御中主神は隠くれたと云ふことになつて居る。つまり天之御中主神と云ふ一元が出来たが、其儘では活動しないで、それが二元に現はれて陰陽となり、生と産との作用に移つた、それから更に多元に作用して宇宙構成に必要な要素の多神となり、夫れ／＼の活動に依つて逐次に宇宙が構成され、太陽系も出来たのである。日本神道を外國人が多神教と認めて居るのは大間違で、一元から出た多元であり、一神からの多神であつて、若し宇宙の活動が無くなると假定すれば元との一元即ち一神に歸り、天之御中主神だけを認めることになる。故に一神に出發した多神であり、決して鈍粟のせいくらべのやうに別個の多神が寄集つたので

はない。

宇宙の構成には無限に各別の意識作用を要する、佛教に曰ふ四臂八臂の活動を要する、故に一神が分れて若干神の作用に移り、宇宙構成の進歩と共に更に新たなる意識作用の必要が起り、遂に萬神となり、八百萬と云ふ無限に及ぶのである、而して其中心の根元意識即ち大中心の神は依然とし殿存し、多神は夫れ／＼系統下に統制的に作用するのであるから、其作用が如何に分れても決して矛盾も衝突もない。夫れ故神道を多神教と認めて居る外國人は此根本が解らないもので神道の教へは決して雜然たる多神教ではない。佛教では如來を中心に於て之れに種々の佛を配し、基督教は根元たる一神を認めてそれから分派した各作用を神として認めて居ないから、意識構成から云ふと不完全である。

古事記の神代記は日本と云ふ小範圍を現したものでなく、宇宙創造以來の意識作用を説いたもので、それに現はれたる神々は元來の意識即ち元來神であると思考する。此等元來神に依つて宇宙が構成され、更にそれが具體されて太陽系其他の次級宇宙が出来、太陽系には日月地球其他が出来、更に吾々地球上人間に直接關係ある日月地球、即ち太陽系に説き及ぼし

更に地球上に於ける人類發生の道程と發生後の推移と共に、宇宙の眞理を示したる所の宇宙及び地球の發達記であり且つ人類の根本神典である、而して宇宙意識が活躍作用する其中心軸として日本と云ふ特殊の國體が結果として現はれたのである。夫れ故神代記と云ふ神典は自然に我が歴史と膠着した、そこで我が歴史の起源は天之御中主神即ち宇宙意識の始元に出發し、我が國のみが神が造つたのであるから神國であると狭く考へて了つた。

本書は古事記を解釋しやうとするのではないが、意識の作用を説明する結果が、古事記の眞理たることを自ら立證することになるから、其意味に於て更に若干意識關係たる神作用の説明を進める必要がある。

第八、古記事に就て意識研究

前に述べた如く、天之御中主神と云ふ一元意識から二元となり多元となつて宇宙が造り創められ、所謂星雲時代になつた、其星雲を先づ形あるものに修理し固成する緒に就く爲めに更に新たなる意識の活躍作用を要するのには當然である、それが即ち意識として伊邪岐、伊

邪那美と云ふ兩神の出現となつた。此兩神は漂へる星雲を掻き別けて淤能碁呂島を造つた、更に兩神の作用に依つて淡路島、隱岐、津島、筑紫島、佐渡、大倭豊秋津島等を生み給ふとあるのは、特に日本の國土に譬へたので、無論此時代には以上の如き國土の名稱はなかつたばかりでなく、日本は大陸續きか、或は日本はまだ現はれなかつたかも知れない、要するに太陽系を整理し地球を完成する其意識作用を後世の日本國土に當て拵めて記録したのであると考へる。

太陽系は兩神に依つて完成した、さうなると太陽系全部を統制する所の中心意識がなければならぬ、其中其中心意識は即ち天照大神と稱へ上ぐる太陽を中心とする大意識である、天照大神を日の神とも稱へるのは、偶然かどうか知らないが、意識關係から云ふても當然日の神であらねばならない。斯く言ふと、天照大神は元來神であつて現人即ち肉體を持たれて神となつたのではないと云ふことになる、さうなると皇室の御先祖が天照大神であり、天皇は天照大神の神裔であると云ふことが否定されやうと取れるかも知れないが、決してさうではない、天照大神は皇室の御先祖であり、天皇は正しく其神裔であるのみならず、天照大

神と申し上げる其意義は、唯だ日本でのと云ふ局限された狭い神靈でなく、宇宙の大神靈に
なるのであるから、同時に日本の皇室は世界的に絶對的偉大のものであり、天皇は世界に唯
だ一の大中心からの延長である所の神裔であることになるのである、故に天皇は日本の天皇
でなく、世界の天皇としての御座に在らせられることが明かになる。之れに就ては、逐次説
述を進める内に於て自ら明瞭になるから、此處では特に此釋明を後に延ばして置いて、更に
若干古事記に就て意識的解釋を爲し、参考とする必要がある。

太陽系が形だけ伊邪那岐、伊邪那美の兩神の意識で定まり地球の形も出来たが、其後の進
化完成は、伊邪那岐神から現はれた太陽系中心意識即ち新たに生れられた天照大神に依つて
爲されるのであつて、大神の御力がなければ太陽系は完成し得ないのである。そこで天の岩
戸開きとなり、天照大神の御光が現はれ、太陽を中心として一切に作用を加へられ、月讀の
神は月界を經營され、須佐之男神は地球を經營せられ、念々地球に生物を發生せしむる段に
進んだ、其意識を大國主神と稱へ、須佐之男神の御子と記録されてあるのは當然である。又
大國主神を國土經經神とするのも當然であつて大國主神の作用に依つて人類が發生すること

になる。古事記には大國主神は出雲國に居られたとあるから、之れを出雲族と稱する説もあ
るが、其時代に出雲なる名稱はなく、後世神々の作用を日本の國土に當て拵めて傳へ残すに
便利にした結果の地名であつて、大國主神は、出雲の住人でもなければ、後日に神になつた
でもない、所謂本來神であつて現人神ではないのである。

大國主作用に依つて地球上に人類が發生した、それはアミーパーからとか、何からとか、
現在の科學的の考へで人間の始祖を想像するのは當らない。意識は全智全能で爲し得ざるこ
となき廣大無邊の作用を爲すのであるから、最初から意識の作用で人間を造つたものと考へ
るのが至當であらう、但し其時の人間は無論不完全のもので、それが轉化して今日の人間に
なつたことは疑はれない。兎に角意識に依つて人間が出来た、併しながら此時代人間には
恐らく使命も何もない、唯だ動物の如くであつたかも知れない、引續き大國主作用で、具體
的人間が完成されると、大國主神の責任は達し得られ、それから後の人間は太陽系中心意識
たる天照大神から地球を理想化する爲めの使命を與へられ、其中心意識の企劃の下に共同作
業をしなければならなくなつた、そこで大國主意識は地球の一切を中心意識たる天照大神の

直接支配下に置くことゝなつたのである。之れは古事記では國土返上となつて居る、而して國土返上に付ても天照大神と大國大神との間に種々意識的交渉が行はれたことも古事記に人格化し歴史化して書き現はれて居る。

天照大神が直接地球へ意識を加へて理想化するに付ては、意識界即ち神界に中心ある如く地上統制の爲めにも中心を定めなければならぬ、其中心は地上一切の中心であり、殊に全人類の中心軸となるのである。其中心軸には何を以てするかと云ふと、無論神界の中心意識と對照する地上中心意識でなければならぬ、そこで天照大神は大國主神なる意識と交渉の結果、地球經營の中心意識を天降らせられたのである。古事記には皇孫邇邇藝之命を天降し給ふたと人格化して書残してある。

凡そ地球上に生物が発生し人類が地球經營を始めるに至つた時は、是非共統制の爲めに中心を要する、其中心なるものは人類の中心を爲すものであるから、人類中から同じく人間を選んで中心とすることは假定であつて不合理である。それかとて眼に見へない神を想像して中心とすることは出来ない。然る時は人類の中心は人以上の人即ち普通の人間を超へた特殊

の使命者でなければならぬ、人間が選舉したり、或は約束したり、或は人間自らが其中心の位置に立つたりすることは、悉く人爲の假定中心である、假定は永遠性がない、そうなるか或る時期に交代することになる、或は人爲の中心は人爲を以て換へることも出来る、或は又其中心地位は他から篡奪することも出来る。斯く考へると人類の中心は永遠に不變のもでなければならぬ、同時に地上の中心は意識的に宇宙の中心意識と對照するものでなければならぬ、然るに斯くの如き中心を地球上に求めても決して求め得られるものではない、太陽系の中心意識が地球を理想化せんとする企劃であればどうしても其中心意識、即ち天照大神が地上中心たるべき偉大なるものを附與するのが當然である。故に天照大神の分身である皇孫邇邇藝之命と云ふ天照大神の代表意識を地上に天降らせたのである。何故に皇孫となつて居るかと云ふと、皇子は天照大神と地上中心との連絡意識として保留の必要からではなからうか、兎に角天孫降臨と云ふことに於て、地上には天照大神なる太陽中心意識の代表座が確立された、之れが即ち高御座である。

斯く高御座は地上の中心であり、又天照大神の分け御座であるから無論神位である、随つ

て地上に二つあるべきものでない、實に地上唯一の天照大神の代表神位である、而して此神位は地上に孤立して存するのではなく、萬神擁護の中心に置かれて居る。之れに就ては更に若干の説明を要する。

抑々太陽系大中心意識であり大神靈である所の天照大神が全太陽系を統制する爲に、更に多數の意識神を分派して夫れ々の活躍を爲さしめて居る。言ひ換へれば天照大神なる大御力から更に多神を生じ、此多神は悉く大神の統制下に協力作用するのである、随つて天照大神の代表神位なる高御座の下には、大神に奉仕する萬神は大神に奉仕すると同様に奉仕するのであるから、高御座の背後には萬神が控へて居ることになるのである。又天照大神が其代表として皇孫を地上へ天降らせられた時に、五部の主神を添へ降せられたと古事記にある如く單獨降下ではない、地上經營に必要な意識の御力を加へられたのである、此御力を考へるに天孫降臨の時代は地上は尙ほ完成しない、人類も不完全の點があつたらう、之れを古事記には猿田彦神を以て人類を代表して書いてある、即ち八衢に異様な面相をして立塞つて居る、天孫の隨神たる宇受賣命は其缺陷を填める意識力であり、布刀玉命は地上のものを肥ら

せ育てる意識力であり、伊斯許理度賣神は地上に出来たものを凝らせて完成させる意識力であり、玉親命は地上生物の靈を司どる意識力であり、天兒屋命は地上の音聲を司どる意識力である等で、更に必要に應じ種々なる御力が神として加はることは悉く天照大神の企劃の下に作用するのである。日本書紀に、天照大神が瀧津島姫（市杵島比賣）、湍津姫（田寸津比賣）、田心姫（多紀理毘賣）の三女を生み給ひたる後「日神の生ませる三女神を以て筑紫洲に降りまさせ、因て之れに教へて曰く、汝三神宜く道中に降りまして天孫を助け奉りて天孫の爲めに祭られよ」とあるのも、高御座に奉仕すべく意識を加へられたのであると考へる以上の如く單に古記だけを意識的に研究しても、宇宙は一切意識の作用に依つて成り、其意識の中心作用は更に地上に意識の中心を作つて地上の進展理想化を進めたことは整然たる合理的事實であることを疑はない。従來の古記研究者は或は其全部を史實的に解釋せんとするが故に、有り得べからざることであると誤解して、之れを架空の神話とのみ思ひ、或は又史實としては不合理なるが故に、吾等祖先の大理想を書き残したるものである、吾等日本民族は此大理想を實現するのが使命であると云ふやうに狹義に認めてゐることは、折角の宇宙

大神典の價値を認識し得ないので洵に惜しいことである。夫れ故古記は偉大なる意識作用を人格化し、神話的に書き現はされたものであると云ふことを述べて置く必要があると考へたまゝに概略ながら其意識作用の参考としたのである。

第九、世界の神位

凡そ統制は中心あつて始めて行はれるものである、是れ宇宙の眞理で不變の原則である。又統制なくして何物も安定することは出来ない。故に此大なる宇宙も此統制の下に實現し、吾等の太陽系も中心があつて統制されつゝあることも疑はない。此統制なるものは意識に依つて行はれるのであるから、自ら太陽系には意識の大中心がなければならぬ。言ひ換へれば宇宙の一切は神に依つて統制されて居る故に、神界には統制の中心たる偉大なる神靈がなければならぬ、古來全人類は悉く此偉大なる御力の存在を認め、之れを造物主と稱へ、ゴツドと崇め、如來と仰ぎ、天帝とし敬つて居る、吾れにあつては之れを天照大神と稱へ奉るのである。

天照大神は眞理の根元であり、萬物生成化育の大御力の發動中心であつて全智全能の統制中心を爲す根元意識であり、大神靈である。吾等の太陽系は此大御力に依つて構成せられ、且つ無限に活動しつゝあるのであるから、此大神靈を太陽に合體して日の神を稱へ上げるのも當然であつて、吾等の此地球と稱する世界は其大御力に依つて保たれ、地上の生物は之れに依つて化育せられつゝあることは疑はれない。翻つて吾等人類に就て考察するに、吾等人類は神が企劃せる地上の理想化に向つて神と協同すべき使命の下に新陳代謝しつゝ時を經過し、種々の試練を重ねて結局は人類の大平和境を實現し、所謂樂園淨土を建設し、佛教に謂ふ所の極樂世界、基督教の理想たる天國たらしめるのである。之れが爲めには統制を要し、統制の爲めには宇宙の意識組織と同様に、一つの中心を要することは無論である。然るに現在世界の全人類が尙ほ安定し得ないのは未だ中心を起點とする統制が實現しないから各民族毎に自衛の障壁を設けて、互ひの利害得失を主として衝突するからである。將來主なる民族が眞理に基く統制を自覺し得た時、即ち一君萬民を實現して大平和境に入ることが出来る時である。

此理想化は天照大神なる神界中心の大意識の企劃であるから、地上人類の爲すが儘に放任することは許されない、故に地上人類は終始大意識の方針に則らなければならぬ、そこで太陽系に統制中心がある如く、地上にも人類統制の中心がなければならぬ、言ひ換へれば神界には一大中心があるが故に矛盾も衝突もなきが如く、現界にも中心が設けられて、之れに依つて矛盾も衝突もなき理想的世界に成功しなければならぬ。

然らば現界たる地上に在つては、如何なるものを中心にするべきかと云ふことになるが、全人類の中心は同じく人間を以てすることは不合理である、何故かと云ふと、前に述べたる如く、人間の中心に同じ人間を以てすれば、其中心は必ず野心ある人間の争奪目標となつて、中心を繞つて争亂の絶へないことは從來の外國の興亡歴史に明かである、縦ひ堅い約束をしても、或は武力を以て保護しても、人爲の中心は矢張り人爲で打壞すことが出来る。それに懲りて大統領制の如く、期限付きの中心を國民の選舉で入札的に暫定する共和國もあるが、此等全部は悉く假定中心であり決して人類永久の不變の統制中心とすることは出来ない。結局大中心は神選でなければならぬ、民選であつては全人類の理想的統制は出来得ない。是

に由つて觀れば人類の中心は人間では不合理であるが故に是非共人間以上の人間を以て中心としなければならぬ、人間以上の人間と云へば神より外にない。然るに眼に見えない神を以て直ちに中心とすることは出来ない、そこで神に代はるべき人、言ひ換れば神を代表する尊き特殊の人でなければならぬ、さうなると其尊き人は神と特殊の關係がなければならぬことになる。此故に神界に於ける天照大神は此現界地上に一中心を天降り給ふたので、之れが即ち高御座である。高御座は地上に天降りたる神位であり、天照大神の地上に於ける代表意識の御座である、故に現ら天照大御座と稱ふべきものである。

惟ふに天照大神は、豊葦原の瑞穂國に代表神位である所の高御座を世界の中心として天降り給ふたのである、豊葦原の瑞穂國とは即ち此世界と云ふ廣義に解釋すべきもので、日本であると云ふことは古事記を日本のことのみと思ふて狭義に解釋した結果に他ならない。

高御座は地球に天降りさせた中心意識であるから地上の意識は悉く此中心に依つて統制せられるのである、随つて世界には唯だ一つで決して二つあるべきものではない、而して其高御座が日本に定められて在ると云ふことは、日本が神國たる其根元を爲すもので、日本の國體

が人為に非らずして神謀りに斯く出来上つて居ることの淵源は此處にあるのである。

斯く地上に人類の統制中心たる神位が出来だが、無論眼に見えないものであるから、之れが直ちに人類の統制中心として現はれることは出来ないことは前にも述べた通りである。そこで此神位には全人類中の一人を据へなければならぬ、其一人と云ふのは天照大神に代はり大神の企劃即ち神慮を承けて全人類を指導し、統制して神人一致を以て世界の理想化を實現することを使命とする、最も神縁深き特殊の人でなければならぬ。無論それは世界に二人とあるべきものではない、故に地上の中心神位たる高御座に立つものは決して誰れでも差支へないと云ふことは出来ない、又力を以て自ら立つことも許されない、唯だ大神に代はり現ら天照大神として神托を負ふ所の特殊使命者のみに限るのである。言ひ換へれば普通の人として神位に立つのでなく、天照大神を御祖とした人にして神、即ち現人神、或は現つ神として始めて神位に在り得るのである。皇室の御祖先は即ち此の天照大神を御祖として人類統制の使命を以て高御座なる神位に立たせられたので、人選でも自選でもない、特に神選に依るので、餘人は絶対に其御位に立つことを許されない、神聖にして侵すべからざるの理は此

處に在る。又此特殊の神命は天皇の御血統に限り他に及ぶものではない、天津日嗣たる皇統が万世一系の理は此處に在る。又高御座は人類の中心であるから人類の活動と共に天降つた筈のものであり、且つ人類の存在する限り存在すべきものであるから、實祚の隆んること天壤と共に窮まりなきことも當然である。又天皇は神位にあつて天業を恢弘し給ふことが使命であり、吾等は悉く人位に在つて人業を以て天業を扶翼する使命がある、茲に君臣の分は永遠に明かである。

更に思ふに高御座は天照大神の代表神位であるから、天照大神に奉仕する万神、即ち天照大神なる大神靈である所の大意識から分派された無数の意識である所の神は、天照大神に對し奉仕すると同様に高御座の背後に奉仕する譯であるから、高御座は万神擁護の上に安定して居る。此の偉大なる神助は天皇の御天職の上に加はるから、天皇は天佑を保有せられることになるのであつて、其天佑は天皇の爲めに調す其ものに御稜威となつて現はれるのである。陛下の御稜威とは斯の神佑が高御座を通じて人類に及ぼすことを云ふのである。

斯く天皇は皇大神を御祖と仰いで神位に立たれ、皇大君として人類に臨まれる現つ大神で

あらせられる。故に神を祭り、神の御心を以て政事を行はせられるので、我が國體は祭政一
致であるの理は此處に在る。明治天皇の御製に

ちはやぶる神の心にかなふべく

おさめてしがな葦原のくに

を拜するも畏し。

第十、神 權

天皇は天照大神に代つて人類を統制統治せられるのであるから、之れは世界唯一の神權で
天皇にのみ限られる特權である。言ひ換へれば、天皇は天照大神の神權を代行せられるので
ある。故に高御座に反抗して神權に逆行するものは、人と云はず國と云はず、神譴を受くる
ことを免れないのは當然で、古來今日に至り、史上の事實に於ても之れを立證するのである
此處に云ふ神權とは從來外國元首が自己の權力を粉飾する爲めに自稱した神權とは全然差別
あることを斷つて置く。

天皇の神權とは三大神權である、之れは三種の神器に依つて表現せられて居る、即ち三種
の神器は天照大神から神權施行の委任状の形となつてゐる、神器の所在、即ち高御座の所在
を示すことになつて居る理は此處に在る。此神器は天照大神の大意識が照應し神感した至重
至貴のものと拜祭する。其御鏡は神託の通りに、天照大神の大靈の懸つたもので、天照大神
の居ます如くである。天皇が御祖の神として御仕へ御親祭あらせられるの理は此處にある。
又應は地上全人類の靈を統制せられる神權委任の御印である。御劍は眞理に背き神意に逆行
するものを膺懲する神權の威力發動を委任された御印である。然るに神器を智仁勇とか、智
情意とかに解釋するのは神器が上述の如く極めて深大なる意義、即ち天皇が全人類を統制せ
られる神權の表現であると云ふ大根元を爲すことに思ひ至らないのである。

神器は斯く至尊至貴なる神權委任の御印であるから、天皇は神器を離れることは出来ない
床を共にして居れとの神託は此譯けである。崇神天皇に至り、畏れ多しと云ふとこになり御
劍は神宮に奉祀せられ、皇系者を以て天皇に代つて奉仕することになつたが、別に御靈を移
したる御鏡を官中に留め給ふたのである。天皇即位の時は必ず神器を奉ぜられるのも神權

代行の御印と云ふことが明かである。又南北朝の争ひでも、神器の所在即ち天皇であつたことを考へても、智情意とか智仁勇を表はした單なる傳統の至寶と云ふやうなものでないことが明瞭である。

第十一、天皇と神

皇室の御先祖は天照大神の大御靈を承けられた現代神で在らせられる、それは今から幾年前であるから解らない、神武天皇建國の大詔に「天祖天降りまして今日に逮ぶまで一百七十九萬二千四百七十餘歳」と仰せられたのは、或は人類發生と高御座の地上降下と何等かの關係があるのではないかとも思はれないこともない、それは古への歴代天皇は宇宙大意識と自由交渉された、俗に曰ふ神懸りであらせられたと拜察することが出来るからである。神武天皇東遷の時鹽土翁に聞く「東に美地あり、青山四方に繞れり、其中に亦天の盤船に乗りて飛び降れるものありと、余謂ふに彼地は必ず以て天業を恢弘し、天下に光宅するに足るべし蓋し六合の中心か、厥の飛び降れる者は、謂ふに是れ億速月ならんか、何ぞ就て都せざらん

や」と仰せになつた此鹽土翁とは人でない、神であり、現人神の神武天皇からは神は翁である、斯く任意に神託を得られたのであると拜察する。其他金鷄の靈驗等、之れを決して歴史の綾ではない、其當時は天皇が政を執らせ給ふには神意を伺つたのである、即ち全智全能の宇宙意識へ交渉されたのであつて、我國の政の根元が祭政一致と云ふのも此事である。降つて日本武尊の東征の時の草薙劍の靈驗の如き、又神功皇后の神懸りに依つて三韓を征伐せられし如き、其他にも歴代斯くの如きことが多くある筈であるが、歴史が不備で書き残されて居ないだけのことであると考へる。

又現人としての皇室の御先祖は地上の何れに在らせられたかは解らないが、人類の發生及發達が亞細亞中央であつたことが事實であれば無論其處に高御座があり皇室の御先祖も其處に在らせられた筈である。其後同地の人類が各方面へ分れたとすると、皇室の御先祖に隨從して終に日本迄移つた民族、即ち是れが天孫民族であらねばならない。古事記に日向の高千穂へ天降つたとあるは、日本國內の地名を捉へて書残したので天孫民族は先づ九州へ移り來つたから斯く云ふたのかも知れないが、其書き残せられた地名にのみ重きを置いて研究した

のでは事實の解決は容易であるまい。

皇室の御先祖が日本へ高御座を御定めになつたのも、天照大神大靈の御示し、即ち神懸つての結果と拜察する。古き大昔は地球構成の経過からして、天變地妖が頻繁であつたと思はれる、それを神懸りて預知せられて漸次に安全地帯に移られたので、そうして此絶海の孤島へ居を定められたのも神の導きであると考へる。蓋し高御座が大陸の盛衰興亡の渦流に冒瀆をされない爲めであらう、若しも高御座が永く大陸に在ると、どうなるか解らない、そこで人類が發達して世界の中心を表現すべき其或る時期迄は高御座を安全に秘め置く神意からして、日本と云ふ世界の形勢に關係ない所に安置したのであつて、それが明治になつてからは時代は最早高御座を秘め置く時ではない、地上人類救済の爲めに世界に乗出す時期となつて日本は漸次に世界の中心として現はれなければならないことになつたのであらう。更に

高御座と歴史との關係を討ねると、牽強附會の嫌ひはあるが、次の如くにも思はれないことはない。それは高御座は或時代迄は秘められる必要からして、古來日本が大陸へ關係を付ける人爲的行動は、或る時代迄悉く神の手で失敗せしめて阻止されたやうなことを認める。

即ち昔から朝鮮とは關係があつたのが斷絶され、又元軍襲來は絶縁され、豊臣の朝鮮征伐は結果なしに終つた、徳川氏に至つて偶然鎖國主義を採つたのは神意に合したのかも知れない其御蔭で珍しくも三百年近く續いた。そうして高御座は世界から依然秘められて人類の冒瀆を免かれたが、時代はそろ／＼高御座を世界に示さなければならぬことになつて、明治維新となり、明治天皇が御出ましになり、皇威四方に輝き、日本の振興は目覺ましいものとなり、天照大神の地上企劃としての我が建國の國是たる天業恢弘天下光宅即ち天皇の天職を恢弘して天下に光あらしめ大平和を建設する其第一歩として先づ東大陸の一端に平和建設となつたのである。以上の關係は更に次の如く言ひ得るのである。

神は時代を造り、人間は歴史を造るだけで、時代を造ることは出来ない。神の謀りは刻々と時代を進めて行く、人間はそれに順應した歴史を造れば必ず成功する。それは神人協同の原則に依り神助を得るからである。然るに時代を無視して之れに逆行したならば宇宙意識の企劃である神意に背いたことになり、如何なることも失敗に歸着するのである。之れは叙上の歴史が事實を示して居る。然らば今は如何なる時代であるかと云ふと、從來高御座を擁護

した吾々民族は、今後は高御座を秘めて擁護するのではなく、高御座を世界の高御座として大發展に努力しなければならぬ時代になつたのである、夫れ故大命を奉じて世界に發展すべく努力することは必ず成功することを疑はない、之れに反して退嬰消極の歴史を造れば、必ず神譚に依つて失敗する、故に對内對外を問はず政治、外交、經濟、軍事等一切、積極精神を以て躊躇遲疑することなく、正義の大道の上に斷行して無限の御稜威を世界に洽ねからしめることが現時代に順應する緊急の使命である。

是れに由つて之れを觀れば、滿洲國を扶掖して平和の建設を遂げることは實に天業を恢弘し天下に光あらしめる基礎であつて、更に亞細亞の平和を確保し、世界の平和建設に進み、御稜威の下に全人類を救済し安定せしめることを日本民族の總目標とし、天皇の下に一致結束して進まなければならぬ。随つて多年の試練を経たる吾々日本民族は徒らに拜外崇物の卑屈精神を放棄し全人類の指導地位に立つべく吾れ自らの向上を謀らなければならぬ、實に是れ神意である。

天皇は天照大神の神裔なるが故に、天照大神即ち御祖先たる皇祖にまします、故に天皇は天照大神に對しては御親祭あらせられる。併しながら臣民は直接に皇祖の大神靈を私に祭することは僭越で畏れ多いことになるのであるから、神宮に對しては他の神々の神社に對する如き祭事を舉行することは出来ない。

又天皇は皇祖皇宗を御親祭あらせられるけれども、其他の神々は皇祖たる天照大神に奉仕し高御座の下に奉仕するのであるから、天皇は其神々の上位に立たせられることであるから其等神々は謂はゞ現つ神たる天皇の臣下の格である。

故に其他の神々に對しては、天皇が御親祭あらせられることはない。官をして又國家をして祀らせ給ふことになつて居る、官幣社國幣社の別は即ち是れである。

天皇は唯だ天照大神を中心とする皇祖皇宗と天系地系の神即ち天神地祇を絶體的に御親祭あらせられるだけである、又臣下たりし現人神、即ち別格官幣社は無論臣下の靈を祀るのであるから、天皇は御祭を行はせられることのないのは無論のこと地方へ行幸等の砌りに神社へ御立寄りになるのも、御参拜と新聞等は記録してあるのは間違ひで、特に御會釋を給ふの

である。

天皇が神社へ行幸あらせられれば、神靈は恭しく御迎へ申上げるので、天皇はそれに對して御會釋あらせ給ふのは、萬民が天皇を奉迎して學禮を行ふのを贊はして、特に御會釋を賜ふのと同じである、故に天皇から神社へ御心を掛けさせられたものは、常に下賜と云ふことになつて居る。

天皇は天照大神直系であらせられるから天系である、其他吾々人類は大國主神の作用にて地上に發生したのであるから地系である、併しながら日本民族は祖先以來天系の下に奉仕し或は其祖先は皇室から分れたものもある等、最も近く天系に接觸する地系で天孫民族と稱へて他民族と異なる地位にあるのは此譯けである。

日本國の中心は天皇であり、同時に國民は天皇を中心として其統治の下に團結して居る、故に尊皇は國民の堅き信念となつて居る、而して天皇は神裔に在ますのであるから、天皇と神とは不可分離の關係がある、故に國民の尊皇は敬神と其義を一にし、敬神の極致は尊皇に歸着するのである。我が日本精神の根本は敬神尊皇に在るの理は此處に在る。之れは宗教を

超越した精神であるから、日本國民は各自の自由に於て夫れ／＼の宗教に信仰を有して居ても、更に其宗教を超へて神を敬ひ天皇を尊ぶことは當然のことである。此事は唯だ日本民族にのみあることで、他國に比類のないことであり、且つ眞似ることも出来ないことである。

第十二、日本の國體

凡そ國家の構成は主權と人民と領土との三要素を以て成ると云ふが、唯だ日本のみは主權人民領土以外に、更に國體の四要素からなるのである。此國體なくして日本國家はない、而して此國體は人爲で造ることは出来ないものであるから、若しも此國體を破壊したと假定すると、最早永遠に日本はない。隨つて吾々天孫民族は、此國體を擁護し、國體の精華を發揮することが共有不變の大使命である。

此國體とは何かと云へば、天地大神の大神靈の照應を承け大神を御祖とし、大神に代つて天壤無窮の寶祚を踐み給へる萬世一系の天皇が中心となり、此中心に依つて國家が成り立ち國民は天皇神授の天業を扶翼し率りて、世界の大平和建設を使命として結束して居る一君萬

民の體を爲す國である。斯く偉大なる世界的使命を有することが、特殊の國體と現れて居るので、之れは神の謀りであり、神と離れて日本の國體はない。日本が神國たるの理由は此處にある。唯だ神が國土を造つたゞけでは神國ではない、神の謀りの下に國家が出来て、神の御心を以て、神の企劃を遂行する爲めに出来て居る國であつて、始めて神國たるの條件が整ふのである。言ひ換へれば、惟神の大道に立つて神意を代行すべき國でなければならぬ。

斯く日本は神謀りに依つて中心が確立し、其中心を基礎として國家が出来上り、天皇は全國家を全國民を提けて立たれ、國民が天皇に竭すことは國家に竭すことになり、國家に竭すことは天皇に竭すことになるのは唯だ日本だけである。外國に在つては國家があつて然る後中心を設けたのであり、且つ其中心は往々他から持ち來つたのも少くない、故に元首も亦人民と同様の地位に立つて國家に忠實を誓ふと云ふことになる。斯く元首と國家とは一體不離ではないから、國家の都合で元首を交代したり、逐出したりするのも不審議はない。彼れは人國であるが故に、人間の勝手で如何様にも造り換へることが出来るが、吾れは神謀りの國であるが故に、人爲で壞すことも出来ねば、又人爲で造り直すことも出来ない。日本は世

界唯だ一つの神謀りの中心國である、世界の中心たるべき此日本は絶対に中心に動搖性があつてはならない。

尙ほ國體上重視すべきことは國家と祭祀が不離關係にあることで、天皇が神事を重んぜられることは申すも畏し、更に神國たるの結果として、國內到る處に神を祀れる神社あり、國幣社あり、官幣社あり、縣社あり、郷社あり、村社ありて、津々浦々神社なき所なく、又各家庭には神棚を設け、敬神の念は祖先から傳統して吾々に及んで居る、是れ亦神國にして始めて之れ有ることである。

第十三、日本民族

日本は神國であるが故に、吾々民族性は祖先以來世界に於ける最優秀なる精神文明民族である、世界を救ふには物質文明では不可能である、神は天孫民族に世界大平和建設の使命を與へたから、其遂行に適する民族性を各潜在意識に共通せしめたのである、而して其精神文明は神の道即ち宇宙眞理を土臺としたのである、之れを惟神の道と云ふので、現代語化して

云へば宇宙絶對道である。故に天孫民族の潜在意識に與へられた根本思想は道義的であつて誠を基礎として居る。

此誠は神に對し、上に對しては敬となり、君に對しては忠となり、親祖先に對しては孝となり、夫婦の間には和となり、人に對しては信となり、衆に對しては仁即ち博愛となり、己れを律しては禮となり、事に當つては武勇となり義となる等、誠の道は宏大にして無邊である。つまり天孫民族は神の心を以て心とするのであるから是非共誠を根元としなければならぬ。然るに現在意識の發達と共に其横暴に任せて、神與の美しき道義的潜在意識を潜在せしめて、神の國でありながら、又天孫民族でありながら、自分で其資格を放棄するものが少くないやうになつたのは、神國たり天孫民族たることを辱めるものである。斯くては本來の使命の遂行が容易になるから、日本が大發展を爲すべき時代に到達した今日、各人各個に私慾私望を主とせる我儘なる西洋式打算的の現在意識を抑制しなければならぬ、抑制し得たらば、必ず神與の民族固有の誠が現はれるのである。例へば國民精神が墮落に傾いた時、戰時其他の非常時事變があると、國民の精神は緊張し甦返へる、此覺醒は即ち外部の刺戟に

依つて現在意識の放縱を抑制するからである。從來事變ある毎に國民の潜在意識の發動が活潑になつて元來の日本精神に立歸るのは此譯である。明治天皇の御製に

敷島の 大和心の 雄々しさは

事ある時ぞあらわれにける

とは日本民族本來の精神を御詠みになつたのと畏れ多く拜する次第である。

要するに日本は神國である、随つて吾等天孫民族は神の御心を以て心とし、敬神尊皇の精神を以て至誠一貫日常の業務めに勵み、天皇の下に衆心を結束して使命遂行に協力するのが當然であり、又斯くすべく此神國に生れたのである、又斯くありてこそ天下に何ものも惧るゝものはない、正義を眞向に驕して、遲疑せず躊躇せず、御稜威を負ふて國を擧げて進むべきである。神は地上人類を幾つかの民族に區分し、夫れ々異なれる使命を與へて地上に協同作業を命じ、其綜合的結果を以て地球を理想化すべく企劃されて居る、此内に於て、天孫民族には指導的救済の使用を與へ、全人類の中軸たらしめて居る、夫れ故優秀なる精神文明民族たらしめたのであるから、道義を以て世界人類を指導する地位に立たなければならぬ

歐米民族は理智を主とした法律的で、權利義務觀念者である。故に物質文明は歐米民族の特徴で、學術技藝百般の發見も其使命上から見て當然であり、地上人類を物質的に賑はすに必要なる民族で指導民族ではない。又漢民族は利害觀念を本とした打算的であり、自主的地位に立つものでなく、勞作を主として地上人類に貢獻するに必要な民族である。此等を指導し精神文明を基礎として、各民族の特徴を配合して、世界文明を完成するのが天孫民族の使命である。此故に世界の學術技藝其他百般の物質文明の結果せしものは悉く中心國である日本に集まり來るのは自然の勢である、それ等は悉く尙ほ缺點ある不完全のものであるから、一旦は本へ入り來つた後は、吾等民族に於て精鍊し且つ完成して魂の入つたものに仕上げなければならぬ。之れに付いては尙ほ事實に徴して日本が如何に外國文明を取扱ひ來つたかの關係を述べる。

第十四、日本の使命

日本は神授の使命上、古來惟神の道に従つて發達し隨つて其民族は無形精神文明の發展

を爲した。其代り物質的は特に勝つて恵まれたことはなかつた。然るに物は總て中心に向つて集結する原則に依り、世界一切の文明は漸次日本に集中され、日本は居ながらにして種々の文明に觸れることが出來た。試みに吾々の身に着け居るもの、使用せるもの、周圍にあるもの等を見るに、殆んど其悉くが日本固有のものではない。例へば衣服の如きも其織り方は支那、朝鮮からの輸入で進歩し、陶器磁器の如きも亦同様で、更に滿目の物質器物の殆んど全部は最初外洋から輸入されたものである。それ等が一旦日本へ輸入されると、其缺陷は補填されて、それ以上のものに仕上げられる、例へば汽船の如きも、外國で發明されて日本へ輸入された當時のものは極めて不完全であつた、然るに今日に於て日本の造船術は頗る進歩し、軍艦の如きは世界の脅威的になつた。醫術の如きも亦日本へ輸入されてから、殆んど世界への發達を見るに至つた。其他の學術技藝も悉く然りである。日本人は模倣が上手だと云ふが、其模倣と云ふことは、不完全物を改良して完成する技能である。發明は歐米人の使命であり、それを完成するのが日本人の使命である。

又宗教の如きも、佛敎は本元の印度で衰へ、支那で發達せず、日本へ輸入されて日本精神

化して魂を打込まれて活きた宗教となつた、中には日本神道を多分に入れて日本化したものもある。又基督教は日本精神を取り入れて完全になれば文句はないが、他教を排する狭量な基督思想は、折角日本へ來ても基督教以外のものは未開の人類のやうに思つて居る心持ちを、其儘持續して日本化に依つて一層完全なものにしやうと云ふ氣がない爲めか、日本精神からして批難すべきものが少くない、之れでは日本に擴まりやうがない。又中には神社參拜を拒否すると云ふやうな自らを封鎖する、氣の毒のものもある、こんな宗教でさへも魂に角日本へ集つて來るからどうかしてやらねばなるまい。

思想の如きも種々のものが集つて來る、近來問題になつて居る共產主義の如きも其一つである。此等は悉く不完全なものであるが故に、其缺陷を補填されるべく日本へ入つて來るのであるから、之れを完全なものにしてやると云ふ指導的地位に立たなければ、我れ自らを辱めるのである。然るに種々外來のものに捉はれるものゝあるのは日本は神國であり、吾れは天皇民族たる自覺がないからである。

儒教は支那から輸入されたものであるが、儒教其ものが決して日本の精神文明を拓いたの

ではない、日本固有の精神文明を文字に依つて現はすことが出来るやうになつたのである、又儒教は支那では行はれないで、日本へ來てから活きたのは、日本精神に依つて魂を入れられたからである。

其他現在日本に在る殆んど一切のものは、皆な世界から此中心を目懸けて集つて來たもので、日本は其等の文明を取入れたが、未だ何一つ外國へ出したものはない、恰も日本は世界の乞食のやうなものであると言はれても致方がない。併しながら日本は唯だ世界の總てを貰ふだけでは本來の使命に背くのである、一旦日本へ來たものを、より以上に立派なものに完成し、さうしてそれを世界へ返さなければならぬ、それが即ち世界人類の指導である。

日本は從來取入れた總てを完全に爲し得たならば、それを世界に出すことが世界救済の使命を果たす一端である。故に吾々は日本民族は世界の總ての世界よりも優れた精神と技能を備へなければならぬ。今や日本は多年世界の各方面から寄與されたことに對して之れに酬ゆべく、全人類幸福の爲めに世界を指導しなければならぬ時代が來たのである。之れは日本は世界の中軸を爲す所の神國であるが故に使命上斯くあるべきことである。其指導には皇

道の宣布を基礎とするので彼れが興へたる物質文明に對し吾れも亦物質文明を以て酬ひよと云ふのではない。

皇道とは皇の道である、天皇道である。天皇は神意を承けて統治の天職を遂行せられ以て天下に光あらしめるので、之れは神武天皇建國詔勅に、天業恢弘天下光宅と仰せられ一貫不變の國是を御定めになつて居る。此詔勅は天照大神の「葦原千五百秋之瑞穂國は是れ吾が子孫の王たる可き地なり宜しく爾皇孫就て治せ」と仰せになつたことを更に具體化したので、此皇祖皇宗の御遺訓は、唯だ皇道に依つてのみ實現するので王道では不可であり、霸道は絶對に用ゆべきものでない。

惟ふに皇道は神意に依りて地上を統治する道で惟神の大道は實に皇道を行ふ根本である、惟神の道は宇宙の絶對道である、宇宙の絶對道は宇宙の眞理で即ち神の心である、神の心を以て統治する是れ皇道に外ならない。結局皇道は心の徳を本とし、王道は形の徳を主とするが故に仁政を行ふだけでは皇道の一部の現はれに過ぎない。霸道に至つては眞理に對する反逆である。明治天皇が

ちはやぶる神のこゝろを心にて

わが國民を治めてしがな

と御詠みになつた其大御心は、即ち皇道の根本である、神を離れて皇道なく敬神の念を離れて、皇道精神はない、故に皇道を以て進むのは世界に唯だ神國日本あるのみである。

第十五、結 論

天皇は天照大神を御祖先として神裔を無窮に傳へて地上人類の中心神位たる高御座に立たせ給ひ、日本なる國家は之れを中心として特殊の國體を成し、國民は天照大神の大意識を代行遊ばされる天皇の天業を扶翼し奉つて世界を指導し、救済して大平和を建設すべき神の使命を負ふ等のことは、叙上概ね要領を盡したるつもりである。此等を綜合して日本を觀る時に、神と云ふことを度外しては決して正當に日本を觀ることは出来ない、結局神國たることを理解し得て始めて正しく日本を認識することが出來て、同時に吾々國民は神縁深き天孫民族で大なる世界的使命を負へることを自覺し、國家の一切、社會の一切、吾々の一切は悉く

天皇を中心として考へなければならぬことが明かに自得される。若しも天皇を離れて國家を考へ、天皇を離れて社會を考へ、天皇を離れて自己を考へたならば、神國の實はなくなり日本も外國も差別がないことになる。此特殊の日本團體がなくなつて、同じやうな國が並立して世界の指導中心を失つたならば、全人類は永遠に統制されずに優勝劣敗の争闘が無限に繰返され、神の企劃たる世界の理想化は阻害せられ、人類は永遠に救はれないことを確信するのみならず、宇宙の意識たる神の心に逆行せる人間の横暴心に對しては、必ずや大なる神罰が降ることを疑はない。殊に特殊の使命に恵まれたる吾々日本民族の上には一層大なる懲罰が加へられるであらう。日本は神國であるが故に、外國よりも幾倍か神に對し世界に對する責任が特に大なることを疎かに考へてはならない。

更に附言を要するのは、日本ばかり神縁關係を述べただけでは物足らない、外國と比較して神縁上如何なる差異があるかも知り置かねばなるまいと云ふことであるが、外國も無論神縁はある、神縁がなければ一刻も存在は出來ない、又其國民もそれ／＼神を認め、神に交渉もして居るから、矢張り神縁絶無と云ふことは出來ない。併しながら日本を除いて絶體に神

國はない、それは日本の如く其淵源から説明しなくても、唯で現在ののみを比較しても明瞭である。

日本には高御座と云ふ神位があつて、天皇は現つ神として之に立たれ給ふ、吾々は日常眼前に活神様を拜んで居る。神國であるが故に斯くあるのである。然るに歐米基督教國で活神として拜んで居るのは基督である、基督は活神であるとしても、それは約二千年前の活神で、基督の後に基督なく、現在は活神の品切れで、二千年前の昔のものを拜むより他に拜む活神はない。夫れ故神國でなく人國である。印度、支那等の佛教國も同様で、釋迦を活神様としても約二千五百年前のことで、釋迦の後に釋迦なく、矢張り古い昔のものを拜むより外に拜むべき神はないから矢張り人國である。斯く世界中を調べても、何れも人國で神國らしい國はない。エチオピアは王統約三千年間も一系で今日に至つたから、日本は威張れないなぞと考へる不明者も稀れにあると云ふことであるが、日本のみが神國であると云ふ自覺がない爲めの錯誤である。

又猶太民族は自ら神の選民であると稱し、且つ其信念を持つて居ると云ふことであるが、

神の選民たる特殊民族が國家を消滅したとは矛盾である。宇宙の大意識が特殊の使命を與へた民族が、國を失つたと云ふことなら必ずや天譴がある筈である、物的に富んでも世界で逐はれ行く不安流浪の境遇は、蓋し天譴ではあるまいか。「シオン」國を見付け出して神國を建設すると云ふ理想があるとしても、人爲では神國は出來ない、神が謀つて神遣られるから神國であるのである。

要するに神國民族たる吾々は、神と不可分離の民族である、故に神の御心に順つて一切を處理しなければならぬ、神の御心とは何んであるかと云へば、天照大神を地上に代表せられ、天照に對する地照の神位に在ます現つ神の御心、それが即ち神の御心を傳へられるのである。故に吾々は勅諭勅語を奉戴して實行することは神の御心に合致するので、又之れが吾々の歩むべき大道である。斯くして自ら救はれ、更に國家が救はれ、延ひて世界が救はれることを疎かに思ふてはならない。詔勅の實行其ものは、已に神國民族たるの責務を竭しつゝあるのである、且つ敬神の誠を致し、日常高御座を遙拜し、皇運隆昌の祈願を爲すことは神國民たる吾等の當然事である。

惟ふに日本は皇運あつての日本であり、皇運なくして日本はない、同時に吾々もない。皇運隆昌にして日本は榮え、日本が榮えて吾々も榮え、更に世界は皇運に救はれるのである。又日常皇運隆昌を奉唱することは、神意に合致するが故に、神助は高御座を通じて御稜威となつて吾等に降ることも疑はない。

明治天皇御製

日の本の國の光のそひゆくは

神の御稜威によりてなりけり

天照らす神のみいつを仰ぐかな

ひらけゆく世にあふにつけても

——(完)——

昭和九年四月廿五日
昭和九年四月三十日
發行

神國日本之皇軍原理
(非賣品)

版權
所有

著者 多賀宗之

發行者 大日本國防協會
松本富夫

印刷者 櫻井巳三郎
東京、城東、大島三ノ三〇〇

發行所 大日本國防協會

東京市世田谷區太子堂町四八二番地

櫻井印刷所印刷

終

